学　　年	中２年	郡　市　名	西　　尾
提　案　者	西尾市立一色中学校		稲垣　康志

研究主題

仲間とかかわりながら、社会的な見方・考え方を生かし、

郷土を愛する生徒の育成～神谷傳兵衛を通して～

１　主題設定の理由

本学級の生徒は、社会科の授業に意欲的に取り組む生徒が多い。地元の伝統行事である「大提灯」を取り上げた単元では、「大提灯」が元禄文化のものだということを知り、歴史の授業により興味をもつことができた。これは、身近な事象が歴史と関連していることに気付くことができたからだと考える。新学習指導要領では、中学校の歴史的分野の指導の重点として、「近現代の学習では、具体的な事例を取り上げ、思考や表現を重視した学習を進める」ことを示している。地域の中で具体的な事例を取り上げることは価値があることだと考える。そこで、社会的な見方・考え方を働かせながら、地元一色町の神谷傳兵衛の三河鉄道への思いについて仲間と共に探究していくことで、より郷土を愛する生徒になると考え、本主題を設定した。

２　目ざす子ども像

・人やものやこととかかわりながら、郷土愛を高める生徒
・課題解決のために、粘り強く追究し続ける生徒

３　研究の仮説

＜仮説１＞　生徒たちの身近に存在する題材を取り入れることで、主体的に追究するとともに、自分たちの故郷と歴史学習が結びついていることを実感し、郷土を愛する気持ちを高めることができるであろう。

＜仮説２＞　生徒たちが『知りたい』と思えるような単元を貫く課題を設定し、課題解決のために社会科の見方・考え方を意識的に働かせるように支援したり、振り返りの場面を設定したりすることで、粘り強く追究し続けることができるであろう。

４　研究の手だて

（１）仮説１に対する手だて

手だて①：身近な題材による単元構想
　神谷傳兵衛が地域のためにどれだけ尽力したかという視点をもたせることで、自分たちの故郷を見つめ直すことができるであろう。

手だて②：調査活動の場を設定
　神谷駅（松木島駅）跡地へ行き、西洋風の駅があったことを写真で提示することで、学習課題をもち、主体的に追究したい気持ちを高めることができるであろう。

（２）仮説２に対する手だて

手だて③：自作資料の提示
　人やものの動き、他市とのかかわりなどがわかるような資料を提示することで、社会科の見方・考え方を働かせることができるであろう。

手だて④：振り返りの場面を設定
　授業の終わりに振り返りの時間を設定することで、自分の思いや考えを自覚でき、異なる視点や課題意識などから多面的・多角的に、自分事として問い直し深めることができるであろう。

５　単元の背景

本単元では、西三河が近代化していく様子を学習する。一色町出身の大実業家で、神谷傳兵衛という人物がいる。神谷傳兵衛は、「三河鉄道株式会社（以下三河鉄道）」の創設時から取締役であったが、経営難に陥った際に、取締役社長となり、いかに鉄道が地域社会を発展させるかを説いて回り、会社を立て直し、一色町に鉄道が走るきっかけを作った。鉄道の運営・発展に尽力した神谷傳兵衛に焦点をあてることで明治維新による日本の変化を身近に考えさせていきたい。

６　研究の流れ

本単元では、神谷傳兵衛に興味をもたせるために、神谷駅（松木島駅）跡地へ行き、西洋風の駅があったことを写真で提示する。生徒たちは「なぜ松木島なのに神谷という駅なのか」という疑問をもつであろう。さらに、駅名に神谷という個人名が使われていることを知らせる。そうすることで、生徒たちはどんな人物なのか調べたいという気持ちをもつことができるであろう。神谷傳兵衛について調べる中で、三河鉄道の社長になったことをきっかけに北は足助、南は蒲郡まで路線を拡張したことを知るであろう。そこで、「なぜ神谷傳兵衛は足助から蒲郡まで三河鉄道を通したのか」について考えさせていく。そうすることで、一色町だけではなく、豊田市や高浜市といった西三河の発展にも繋がっていることに気づくであろう。また、三河鉄道が赤字を抱えている中、社長に就任した神谷傳兵衛の思いに迫ることで、地域のために尽力していたことを理解することができるであろう。これらの学習を通して、鉄道がもたらした近代化を多面的に考え、より郷土を愛する生徒へと成長することを期待する。

抽出生について

抽出生Ａへの願い

授業や調べ学習に対して、とても意欲的に取り組むことができる。また、社会的事象に対して、自分なりの考えや疑問をもつこともできる。本単元でも、単元を貫く課題を納得がいくまで調べ、級友とかかわることで自分の考えを深める姿を期待している。

単元「西三河の文明開化～神谷傳兵衛を通して～」の指導構想（１１時間完了）

		教師の支援
つかむ	○明治政府による様々な新制度について学ぼう（３） ・明治時代になって、一色町も変わったのかな。 神谷傳兵衛を通して、一色町や西三河の文明開化を知ろう（２） ○松木島駅跡地へ行ってみよう（２） ・神谷駅の由来が神谷傳兵衛だったなんて驚いたよ。 ・こんな西洋風の建物が一色町にあったなんて意外だな。 ・どうして神谷傳兵衛は三河鉄道をつくったのかな。	・一色町に鉄道が通っていたことを理解できるように、神谷駅があったことを伝える。 ・神谷傳兵衛が大実業家であったことをおさえるために、富豪ランキングを提示する。
ふかめる	「なぜ神谷傳兵衛は足助から蒲郡まで鉄道を通したのか、その理由を考えよう（３） ○「なぜ神谷傳兵衛は足助から蒲郡まで鉄道を通したのか」について考え、話し合う（３） ・神谷傳兵衛は三河鉄道を作るのに、挙母猿投といった現豊田市まで線路を延ばそうとしていたらしいよ。 ・高浜や大浜で生産された工管や瓦を輸送する手段として三河鉄道はできたんだって。 ・三河鉄道ができる前に、西尾鉄道ができているね。それを参考にしたんじゃないかな。 ・神谷傳兵衛はお金を稼ぐことだけではなく、西三河の発展のために尽くしてくれていたんだな。	・見通しをもてるように、予想をたてる。 ・人、もの（産業）、西尾鉄道との比較など、様々な観点から見方・考え方を働かせることができるように資料を準備する。 ・鉄道の広がりについて視点をもてるように、豊田市や碧南市などの史跡、年表、地図、文章資料なども用意する。 ・三河鉄道ができる前と後を比較できるように、複数の地図を提示する。
まとめる	神谷傳兵衛について紹介しよう（３） ○神谷傳兵衛の思いに迫ろう（１） ・松木島八幡社の灯篭は神谷傳兵衛が寄付してくれたものなんだね ・神谷傳兵衛の業績を一色町の人たちが讃えていたから、神谷駅という駅名にしたんだね。 ○神谷傳兵衛についてまとめよう（２） ・神谷傳兵衛のことを知らない生徒が多いと思うから、みんなに知って欲しいな。	・神谷傳兵衛が慈善事業として様々なところで寄付をしていたことを提示する。 ・文化祭で発表する場を設定する。

７　研究の実際と考察

（１）つかむ場面

写真１

つかむ場面では、単元の導入として、まず教科書（文明開化まで）を学習した。文明開化の学習の時に「西洋化」に焦点をあて、当時ヨーロッパからワインが伝わったこと、ワインの一杯売りを日本で初めて行った人が一色町出身の神谷傳兵衛ということを伝えた。また、この時代の鉄道が近代化のためにいかに重要であったかを知らせる必要があると考え、大久保利通が、近代化の政策の中で、鉄道建設を強く主張したことを伝えた。さらに、神谷傳兵衛が大実業家であることを知ってもらうために、富豪ランキングを提示した。それらを確認した上で、目的地も告げず突然フィールドワークに出かけた。目的地（写真１）に着くと「ここはどこでしょう。」という質問を投げかけた。この小学校区に住んでいる子たちは「松木島駅」があった場所だとすぐに答えることができた。さらに、「松木島駅は、７０年以上前は違う駅名だったんだけど、その駅名を知っている人はいる？」という質問をした。答えられる人はいなかったため、ヒントとして人の名字が入ることを伝えると、ピンときた生徒は前時の授業を思い出し「神谷」と答えた。そこで、当時の神谷駅の写真（写真２）を見せた（写真３）。すると、「思ったよりオシャレじゃん。」「結構大きいね。」などのつぶやきがあった。抽出生Ａは特につぶやかなかったが、後から話を聞くと「隣の家は木だけど、神谷駅は違う。」などと建物の材質に注目していた。さらに、「今もこの駅の一部が残っているから探してみよう」と伝えると、仲間と協力しながら駅周辺を意欲的に探す姿が見られた。少しずつ興味をもち始めたので、三河鉄道の路線図を見せ、何という名前の駅が他にあるのかクイズ形式で行った。その中で、「三河鉄道ってどうしてこんなに曲がっているの？」というつぶやきがあった。そこから、『なぜ神谷傳兵衛は足助から蒲郡まで鉄道を通したのか、その理由を考えよう』という課題を設定した。

写真２

写真３

（２）深める場面

資料１

深める場面では、まずは一般論として鉄道の利点を考えさせた。すると、「たくさんの人を遠くに運ぶことができる。」「移動が楽。」という「人」に関する視点と「重たい物をたくさん、遠くに運ぶことができる。」という「物」に関する視点が出てきた。さらに、課題を追究する時に「人」「物」以外にも三河鉄道より少し前から開業していた「西尾鉄道」にも視点をあてた。抽出生Ａは予想として「三河全体に鉄道を通して、東京の文化を取り入れることで会社を広げようとしたから」と考えた。その後の対話で「利益をあげることが目的」と言ったので、西尾鉄道のできた経緯をまとめた自作資料「西尾鉄道の誕生」（資料１）と西尾鉄道の経営状況をまとめた自作資料「西尾鉄道の経営について」（資料２）を調べるように指示を出した。抽出生Ａは、これらの資料を読みこみ、「鉄道ができる前は交通・運輸の中心は帆船・川船だった。」「西尾鉄道の純利益は明治 45 年から大正３年の間で約７倍になった。」という二つの読み取りから、資料３のように「神谷傳兵衛は西尾鉄道を参考に莫大な利益を得ようとした。」と考えた。さらに、どんなものを運んでいるのか知りたいと言ってきたので、「駅のできた訳」（資料４）を渡した。資料４は豊田市にある三河鉄道の駅の詳細（輸送した物資など）が載っているため、珪砂やレンガ・木節粘土などが運ばれていることを読み取った。さらに、三河鉄道の路線図から蒲郡は海が近く、足助（豊田）は河川が多いことから、鉄道だけでなく、船も効果的に使っていたのではないかという考えをもった。これらから、「神谷傳兵衛は西尾鉄道を参考に莫大な利益を得ようとした。」という予想に根拠を踏まえつつ、思考を巡らせることができた。

資料４

西尾鉄道の誕生

明治 21 年（1888 年）東海道線　大府～浜松間開通
（刈谷駅、岡崎駅、豊橋駅誕生）

明治 24 年（1891 年）東海道線　安城駅誕生

→駅周辺に運送会社や郵便局が建ち、発展をとげる。

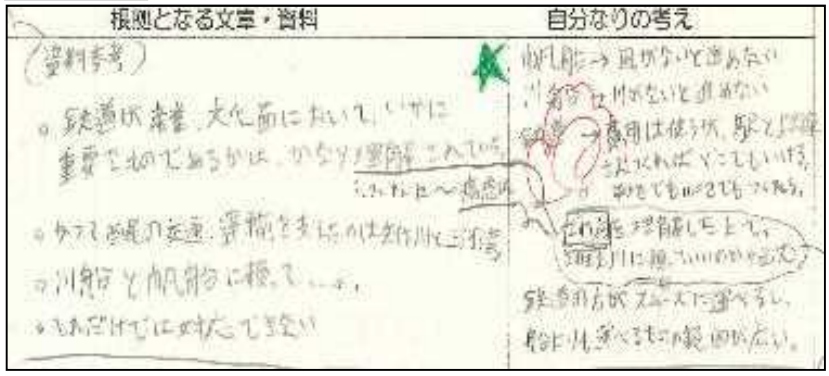
資料２

西尾鉄道の経営について。

営業実績の推移　明治 45 年（1912 年）～大正 13 年（1924 年）

年次	乗客数（人）	貨物量（t）	資本金（円）	純利益（円）
明治 45 年	230654	1272.3	300000	14560.2
大正３年	243722	6537.5	300000	18276.8
６年	415474	34966.9	500000	27804.2
９年	559585	43429.2	600000	70930.0
13 年	674901	51667.8	2000000	101927.5

資料３



他にも、「人」に注目した生徒には、「三河鉄道の利用者を増やすポスター」（資料５）や自作資料「駅の年間利用者数（一色町）」（資料６）などを提示した。これらの資料から、観光客を増やすようにポスターを作って三河鉄道の利用者を増やそうと努力していることや、実際に５２年間で利用者が２倍以上になった事実をまとめ、出勤・通学・観光など様々な面で鉄道が利用されていることを知った。

抽出生Ａの授業日記
三河鉄道の路線図から蒲郡は海が近いし、足助は河川が多いから、鉄道だけでなく、船も効果的に使っていたと思う。

資料６

資料５

駅の年間利用者数

	神谷駅（松木島駅）		三河一色駅		西一色駅	
昭和３年	年	45,971	年	76,074	年	60,510
	月	3,831	月	6,340	月	5,043
	日	126	日	208	日	166
昭和 55 年	年	118,054	年	186,143	年	224,915
	月	9,837	月	15,512	月	18,744
	日	323	日	510	日	616

資料７

「物」に注目した生徒には、資料３や自作資料「神谷駅と取引のあった場所と品物」（資料７）などを渡した。これらから、重たい珪砂やレンガは電車で運んだ方が搬出しやすいことや神谷駅から全国各地に物資が搬出入されていたり、一色のうなぎが有名になったのは三河鉄道があったからではないかなどと予想したりする生徒も出てきた。

「西尾鉄道」に注目した生徒は、抽出生Ａと同様に、神谷傳兵衛は西尾鉄道を参考にして、西尾鉄道が通っていない一色町を含めた海沿いや豊田市などの山沿いに着眼し、利益を出そうとしたのではないかと考える生徒が多かった。

抽出生Aの授業日記
神谷傳兵衛は西尾鉄道を参考にして、今まで鉄道がなかったところに鉄道をしいて利益を出そうとしたのではないかと思う。

発表をする場では、『なぜ神谷傳兵衛は足助から蒲郡まで鉄道を通したのか、その理由を考えよう』という課題について、まずは自分の調べた内容を隣の　　受け（写真４）、根拠に説得力があるか伝えあった。その後全体で発表するように設定した。調べ学習で「人」「物」「西尾鉄道」の視点に、「西尾」「一色」「高浜」「豊田」などの各地域の特色を組み合わせて発表することができた。そこで、「三河鉄道はたくさんの人に利用されているし、たくさんの物を運んでいるね。ということは三河鉄道の経営はどうなっていると思う？」と補助発問をした。生徒たちから、「利益が上がった」「もうかるようになった」の声が上がった。生徒の思考が抽出生Ａと同じように「利益が目的」という流れに傾いたため、「傳兵衛の面影を訪ねて」という自作資料（資料８）を提示した。そこから、神谷傳兵衛が三河鉄道の社長に就任したときには三河鉄道が借金をしていて約９０億円を増資したり、沿線の町村を社長自ら毎日のようにまわったりしたこと、東京と西尾を６２回も往復していることなどを知った。その上で、『なぜ神谷傳兵衛は赤字経営をしていた三河鉄道の社長に就任したのか』という発問をした。生徒たちからは、「赤字を建て直すぐらい鉄道事業は利益が得られるものだと思う」「自分が育った一色町への恩返し」などの意見があがった。抽出生Ａは「三河鉄道を続けていけば、愛知県の町村がさらに盛り上がり、地元の一色町のためにもなると考え、自分が貧乏になってでも再興しようとしていた」と発表した。実際に神谷傳兵衛がどのように考えていたかはわからないが、利益だけでなく西三河のことを考えて三河鉄道をつくったと考えることができた。

資料８

「傳兵衛の面影を訪ねて」

年　月	で　き　ご　と
大正３（1914）年２月５日	刈谷新（現・刈谷）～大浜港（現・碧南）間が開通。 ※実はすでに**財政難！**
大正３（1914）年10月８日	三河鉄道２代目・**久保社長が死去** ※その後間もなく、**役員全員が辞任！**
大正４（1915）年10月28日	刈谷新～知立（現・三河知立）間も開通。
大正５（1916）年４月５日	**神谷氏は鉄道事業の重要性を思い、三河鉄道３代目社長に就任した。自ら莫大な資金を投入して経営再建を果たすとともに、知立～半田を経て越戸まで鉄道建設が急務であると考え、資本金 50 万円を 75 万円増資、資本金を 125 万円にして、延長工事に取り掛かることにした。**会社の計画に対して、地元は非協力で用地の買収、資本金の払い込みは意のようにならず、延々として進まなかった。このような状況の中を**神谷社長は、沿線の町村を毎日のように回り、株式の引き受けを勧誘したという。引き受けに無関心だった沿線の町村も、会社の熱意というより、神谷社長の誠意に心を動かされ、次第に応募する者が増えていった。**
大正11（1922）年１月17日	越戸まで開通。
大正11（1922）年４月24日	神谷傳兵衛死去。（６６歳）

抽出生Aの授業日記
三河鉄道を続けていけば、愛知県の町村がさらに盛り上がり、地元の一色町のためにもなると考え、自分が貧乏になってでも再興しようとしていた。神谷傳兵衛への地域を大切にした思いがすごい。自分も一色が好きだから、地域のために貢献したい。

（３）まとめる場面

神谷傳兵衛が命を削ってまで三河鉄道をつくったことを学んだ上で、「どうしてみんなはこんな偉大な神谷傳兵衛のことを知らなかったの？」と聞くと、「教えてもらってないから。」「聞いたことがないから。」と答えた。「それって何かもったいないことない？」と続けると、うなずく生徒が多くいたので、「神谷傳兵衛を知ってもらうために、どんなことができると思う？」と投げかけた。すると、「回覧板に挟んでもらう」、「神谷傳兵衛の人生を劇にして昼放課に流す」、「文化祭で発表する」、「ポスターを作って掲示する」など、様々な方法が出てきた。ちょうどこの授業の約 1 か月後に文化祭があったので、そこで全校生徒や地域の方に発表することを目標にどんなことを伝えるべきか考えた。すると、「たぶんほとんどの生徒が知らない人だから写真を使った方がいい」、「僕ちが教えてもらったように神谷駅の写真も見せた方がいい」、「興味をもってもらうためにクイズ形式にした方がいい」、「教科書に出てくるような人と比較した方がいい」、「自分たちが勉強したように『人』『物』」『西尾鉄道』との関わりについても話した方がいい」「今、三河鉄道はないんだから、その理由も説明した方がいい」などと続々と意見が出てきた。文化祭当日はクラスの代表として８人が堂々と発表した。（写真５）ここから、物事を発信する力も身についたと考える。文化祭後には、教頭先生から地域の方から神谷傳兵衛の本を借りたいという問い合わせがあったことを伺い、それを伝えた時の生徒たちの喜ぶ姿は

写真５

た

また、後日談にはなるが、現在の小学校６年生の教科書（東京書籍）にも一部神谷傳兵衛の建築物の記載がある。それを伝えた際にも、「何かうれしい」、「神谷傳兵衛が認められた気がする」と言う生徒がいて、郷土に対する愛着が湧いてきたと感じることができた。

８　研究の成果

〈仮説１〉

生徒たちの身近に存在する題材を取り入れることで、主体的に追究するとともに、自分たちの故郷と歴史学習が結びついていることを実感し、郷土を愛する気持ちを高めることができるであろう。

〈仮説１の成果〉

松木島駅跡地に実際に出向き、当時の駅の写真と現在の風景を比較したり、三河鉄道の路線図を確認したりすることで、自分たちの住んでいる地域に鉄道が通っていたことを理解することができた。さらに、明治時代の富豪ランキングに神谷傳兵衛が載っていることから、「神谷傳兵衛はどんな人なのか」「神谷傳兵衛と三河鉄道はどうかかわっているのか」など生徒たちに興味をもたせることができ、その後の調べ学習が主体的になった。そのため、生徒たちの身近に存在する題材を取り入れることは有効であったと考える。

〈仮説２〉

生徒たちが『知りたい』と思えるような単元を貫く課題を設定し、問題解決のために社会科の見方・考え方を意識的に働かせるように支援したり、振り返りの場面を設定したりすることで、粘り強く追究し続けることができるであろう。

〈仮説２の成果〉

今回は、松木島駅跡地に行った際、生徒の中から「三河鉄道ってどうしてこんなに曲がっているの？」というつぶやきから『なぜ神谷傳兵衛は足助から蒲郡まで鉄道を通したのか、その理由を考えよう』という課題を設定した。その上で、自分の調べたい内容に応じて、「人」「物」「西尾鉄道」の視点に、「西尾」「一色」「碧南」「刈谷」「高浜」「豊田」などの各地域の物流や利用者などの資料を提示したことで、生徒たちは見方・考え方を働かせながら、主体的に調べ学習を行うことができた。よって有効

であったと考える。

9　今後の課題

今回、一色町の偉人である「神谷傳兵衛」に焦点をあてたことで、生徒たちの郷土愛が高まったことは非常にうれしい姿であった。しかし、見方・考え方を求めすぎたため、資料が膨大になってしまった。さらに、各市史によって掲載されている年号が異なり、はっきりとした違いを見出すことができず、予想することに留まってしまった。郷土史を扱う場合はその人物像やロマンも必要だとは思うが、生徒たちの思考を引き出したり、整理できたりする資料を研究した上で、授業を行うことも必要だと感じた。また、今回は文明開化の鉄道事業に焦点をあてているため、教科書では明治時代のできごとになる。しかし、西尾市は東京・大阪などの都心部からかなり離れているため、大正時代後半から昭和時代前半の内容が多く、ずれが生じている。地理的にも仕方がないところもあるが、郷土資料の難しさを痛感した。今後もよりよい教材の研究とそれを活かした授業の在り方について考えていきたい。

10　参考文献

『神谷傳兵衛』『写真で見る三河線誕生百年』『ふるさと散歩道一色町の歴史再発見』
『副読本いっしき』『副読本西尾』『一色町誌』『西尾市史』『碧南市史』『高浜市史』
『知立市史』『刈谷市史』『豊田市史』『蒲郡市史』
『名鉄三河線駅のできた訳』（豊田市近代の産業とくらし発見館より）

―西尾・中２　６－